G001

見出し クルドリ

解説

幸田露伴日人と作品

篠田一士

見

精神王国の建立者

見

昭和改元のみぎりに幸田露伴は、ちょうど六十歳を迎えようとしていた。すなわち、この年齢は、今日ならば、決して高齢とはいえないが、昭和の年齢は、今日ならば、決して高齢とはいえないが、

一ページアタマ

二ページ中央

一ページアタマ

二ページ中央

52

6P

[illegible]年代ならずしも適切ではないとよぶことはかの日本の文壇で、六十歳の作家の生涯を、しかし、当時において、それも、現役の文学者として、[illegible]活動を営営とつづけていることは、まさまでも、稀有な存在だったといわなくてはなるまい。

早い話が、露伴が文学的出発を行ったのは、明治二十年代、すなわち、一八八〇年代からの、自九年代にかけてのこの四十近く昔、彼と併称されていわゆる紅露道鷗と謳われた、四人の文学者の生死、そして、文業の成果は、ほぼ同年輩の四人の文